

立川市子ども未来センター

TACHIKAWA CITY KODOMO MIRAI CENTER

No. 10-028-2013作成
改修・保存/まちづくり/外構・景観
事務所/その他

| | | | | | | |
|-------|------------------|--------------|----------------------------|-------------|--------------|--|
| 発注者 | 立川市 | カテゴリー | | | | |
| 企画・設計 | 清水建設株式会社一級建築士事務所 | A. 環境配慮デザイン | B. 省エネ・省CO ₂ 技術 | C. 各種制度活用 | D. 評価技術/FB | |
| 企画・監理 | 株式会社佐藤総合計画 | E. リニューアル | F. 長寿命化 | G. 建物基本性能確保 | H. 生産・施工との連携 | |
| 施工 | 清水建設株式会社 | I. 周辺・地域への配慮 | J. 生物多様性 | K. その他 | | |

旧市庁舎と空地の再生 - ひとと建物を「つなぐ」サステナブルな関係を目指して



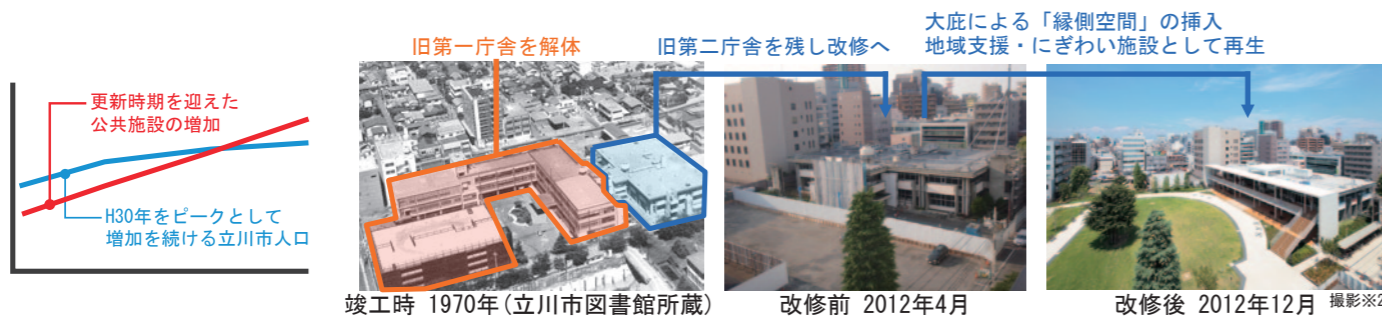
撮影※2

「箱モノ」開発からの脱却 - ストックを活かし、まちとつなげる
立川市子ども未来センターは、1970年に竣工した立川市役所第2庁舎を改修し、子育て、教育、市民活動、文化芸術活動を支援し、さらに賑わい事業によって地域のにぎわいを生み出すことを目指した、市民に開かれた活動拠点として計画された。
立川市はこの施設整備にあたり、建設投資の縮減と、公共施設の一斉建替え時代を迎える現在の行政が抱える課題への取り組みとして、箱モノ建設による開発事業ではなく、築43年経過した建築の再利用によるストック活用のアイデアをPPP（官民連携）という事業手法を活用し、公募を行った。建設から維持管理さらには賑わい事業の自主提案といった包括的な提案を公募し、合人社計画研究所を代表企業とする、清水建設、佐藤総合計画、studio-L、街制作室、ワーカーズコープ、ムービック・プロモートサービス、共立、壽屋の9社による提案が採用された。



撮影※1

上/南側外観 下/大きなテラスが外と中をつなぐ



建物データ

| | |
|------|-----------------|
| 所在地 | 東京都立川市 |
| 竣工年 | 1970年(改修:2012年) |
| 敷地面積 | 9,222㎡ |
| 延床面積 | 4,495㎡ |
| 構造 | SRC造一部S造 |
| 階数 | 地下1階、地上2階 |

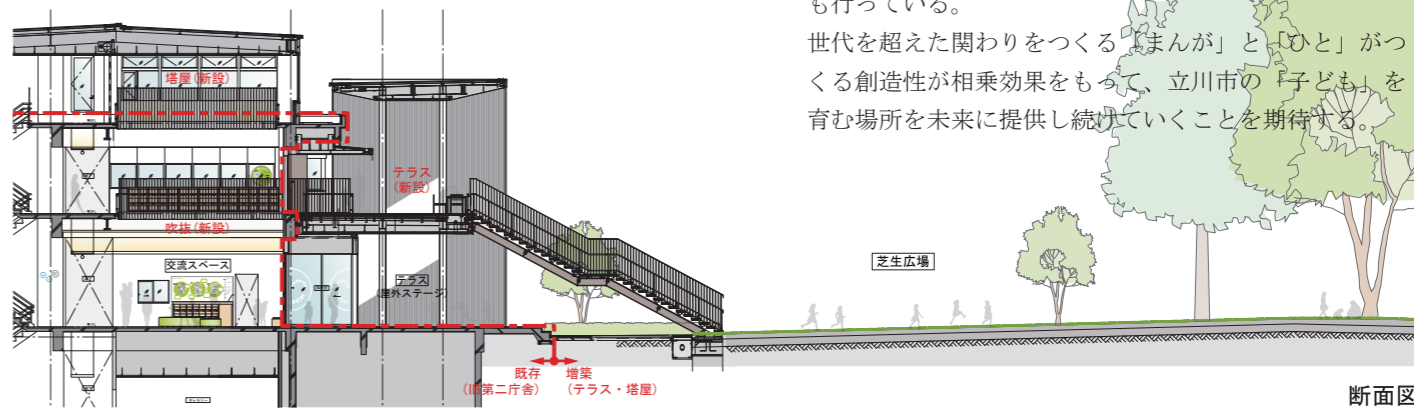
3つの「つなぐ」仕掛けのデザイン

①大きな縁側で「つなぐ」ソトとナカ

このプロジェクトでは、広場と、既存建物との関係をどのように捉え、そこに賑わい事業としてどういった自主事業を提案するかが大きな課題であった。当グループは広場と、旧庁舎建物との関係を見直すことを行った。新たなひとびとを迎え入れる施設のデザインポキャブラリーとしてのゲート状の囲い(大庇)を旧庁舎と広場の間に貫入させ、広場に面した旧庁舎の建具を更新し、内外一体利用可能な縁側デッキ空間を新たに設えた。外部通路としての庇下空間の役割とともに、イベント時に内部の活動が半屋外の空間に溢れ出ること、ひとびとが混在する自然発生的な市場のような賑わいを感じさせる。
広場には市役所時代の車寄せにあった大木が新たな施設のシンボルとして、心地よい木陰を落とし、デッキを舞台と見立てた観客席のような緩やかな勾配をもった広場とすることで人々にやすらぎと賑わいの場を提供している。広場の勾配は、新たな庇建設によって発生する排土を盛土として利用することで、排土ゼロとするための環境負荷低減の取り組みの一環であり、未来への思いを形にする建築における些細ではあるが、重要な要素として捉えている。

②吹抜で「つなぐ」空とにぎわい

建物内部では、屋上から一階までの床を抜き、吹抜を作ることで、様々な用途の活動につながりを与えた。既存建物が、モダニズム建築の流れを組む、コーナーを丸めた彫塑的なコンクリートの表現をもち、平面的な連続性をもった空間であったことに対して、我々はそれを3次元化して活用したと捉えている。また、解体の痕跡は隠すのではなく、建物が抱える時間の存在として、そのまま残した。その残し方をデザインすることによって、既存ならではの均質ではない、ひだのある空間をつくることができ、ユーザーが既存の痕跡を上手に利用している状況を見ることが出来る。



断面図

設計担当者

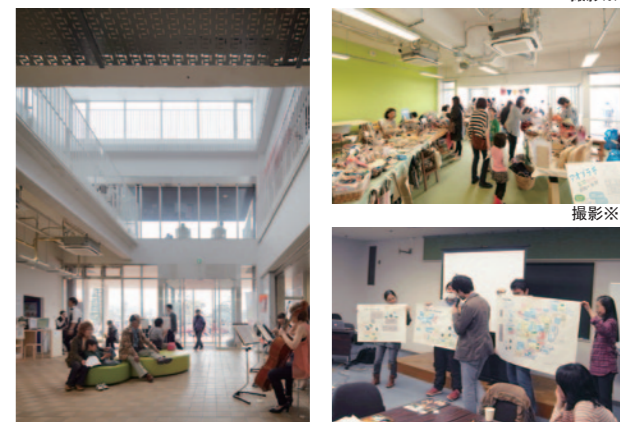
清水建設 建築:牧住敏幸、及川直哉/構造:小林俊樹、鷹羽直樹/設備:池田真哉、佐藤文人、飯島淳一、石川栄一/企画:新聞英一、櫻庭記彦、福永唯行
佐藤総合計画 企画:川田一栄、油谷郁夫、並松史郎/監理:花形政則、吉井隆義、伊勢本昭
設計協力 外構:鈴木葉菜子、濱久貴(フィールドフォー・デザインオフィス)/照明:角館政英、若山香保(ぼんぼり光環境計画)/まんがばーく内装:福井滋(合人社計画研究所)
写真撮影:※1 Forward Stroke、※2 小笠原岳写真事務所

主要な採用技術(CASBEE準拠)

- Q3. 1. 生物環境の保全と創出(外構緑化、芝生広場、既存樹木の保存)
- Q3. 2. まちなみ・景観への配慮(歴史性の継承、新たなシンボルの形成)
- Q3. 3. 地域性・アメニティへの配慮(空間提供、豊かな中間領域の形成、2層のテラス)
- LR1. 2. 自然エネルギー利用(自然換気、自然採光、吹抜・ハイサイドライト)
- LR2. 2. 非再生性資源の使用量削減(既存躯体の継続使用)
- Z. その他(PPP事業)



撮影※2



撮影※1

上/吹抜2階 左下/吹抜1階 右中/協働事務室
右下/市民活動ワークショップ

③ひとが「つなぐ」新たな出会い

今回のプロジェクトでは、建築というハードの提供と共に、賑わい事業として導入された「まんがばーく」を中心としたソフトの提案と、完成前から市民団体と行われたワークショップによって市民活動の積極的な参加を促すことで、継続的な施設の利用を促す「仕掛け」づくりも行っている。
世代を超えた関わりをつくる「まんが」と「ひと」がつくる創造性が相乗効果をもつて、立川市の「子ども」を育む場所を未来に提供し続けていくことを期待する。